中村俊定文庫
文庫 18
709
1

中村俊定文庫
文庫 18
709
1

倆ハ巧也

古文國ノ字也

君子ハ不レ有二小ニ而有二大ニ
愛也。小人ハ多カラ大ニ愛ヲ
有レ小ニ也。彼倆百般ニ
皆爾リ変レ俳歌ニ関カル於
国論ニ以ナリ道ヲ俱スルニ於言ニ非ニ
業舒ノ性ニ霊ニ而納ルニ中ニ雅顔

蘭麝の家。上に為ては言腐
辭。彌學ぶ而弥一ぶ。豈可
不慎乎哉。色財と無形。
古祖。青苔蘿。曉雲。閑文
ふ玉子。共。採道お蕉翁。
彰言於已。加以新古の

出藍ふ名者也。蓋於
現事。未必可觀而難
量。任重學佛之
法。應須展拡胸中
為。咸後正。言ふ論
稿。實可謂識時務矣。

鳥獣(アラ)儒(ニ)有(ル)君子小人
と名(ニ)於(テ)桃(ニ)比(ス)云
寛政十一年己未春日
東成瑞(ニ)居(シテ)敲(ヲ)吹(ニ)言(ヲ)
おせき

新五子(サキ)書(フミ)あり二(ツ)出(サリ)
おの五子出(サ)ぬ書(フミ)あり二(ツ)出(サリ)
ぬ故(オコナ)ふ此五子(ニイセイ)菖号の姉才
子(シ)あまぶ子(シ)らぐも重(シ)もと
きんれ世(コヅリ)事(シ)やあるとして作(シ)
めけ五子も作(シ)成ふ(シ)ふ
文(アヤ)をくるかぶ(シ)り(ヒ)新(サヘ)

まことの詩（キンシウ）の秘（ハラハタ）と称（サヅリ）もきるは
うつ思（ヲドロク）べきなり。されども
俳諧の道の学（フミト）ねくして後（ヨミ）て此（コヽロ）
をたしなむべき理（ナカバ）をもつて
新古を折み撰（ヨラ）ざるべからず
文仮名遣の
不本しるべし
参世のそ
まれ

新古を折衷
俳諧は其うつて歌連句の次なるべ
かるべかは向上は一路なるべ
いてや古きを尋ねるもなすべきなる
事なるは一ひの所作なる志のと
ものいまだ成ることなるべ
俗語を話をしして造次もう
まことに顛沛にもわすれざ

近世流行俳諧の意を求るに放なし
さらに行し我乃かちらよゝ升よ太祇蕪村
青蘿暁臺闌更文我み子あらいつまて代々
此道としるゝまことみえてなよ上よ
なりしそのうつろひもなくいつゆれ
はてようきてわ世のはくしぬまとみ
返てよるゝ我よみするまでぬ人ゞの俳韻
を諷さなきのなし ましくて闌更文ぬ人人ハ

おめのさまるしぬおやなきハ一うさぬるれ
俳そて此み子の発句我まていゑのよを
ようにきもてふまろまはるとてた右社
うちはるよ座く おめかゝのあさきま
係きもみ我ぞし はよすとるし我
ふみあよ人のいうしてあて見付さう
きんちまるを梓よめともせて四方のきよ
人よ頒ちおくらんとよ我まみやうれよし

くはさてさきへ毎ちのむかひかくう
なつぞよし仏ハ管城をして天は宮を
うつひ蒙昧をきてわか門海を涵さまい
ともめまてなかまたゆとうく称しく
あらへさかまく硯石よのあふれちらす
ある極の余ろさうへしくひとさおよ
くらき住まししはとろていろみの海
ろいなをかくく乃まよ硯をを待つ汁る

後世ちかきを見人あき見をなつせ
あまりしき紙面のなつてらまよゆ
みちてき以ていなくんうしとはしいな紙
京く志らして綴り侍るぬ

寛政十一未のとし 正月

ほく斎画書

俳諧發句新五子稿

平安　嘉舎宮言了編

春之部

正月　正月や春の町より松の壱　蘭更
歳旦　月を吸て梅ぞくぼまれ春　太祇
　　えびの尾さくろや雪よ古くろみ　〃
　　春門や松に二本をうの紀　蕪村
　　鶯鳴れをしへまつらん春の雲　青羅
　　初日新人よ先さけとこう邨　〃
　　松のひゞほの〳〵とゆるむの春　暁臺

ふり袖の大わらはもしはけらめ　蘭更
ゑとりものいとゑ氣はしるたのもの　、
うつくしう老ゐ初るまの光景　、
えびやらんえ氣はいとしきゑん　、
えびや此きらるまて宮よあるし　、
恵方　永ゑ方多し　松時いつくしは　、
雑煮　飯炊し永ゑもあるめ新春景　太祇
蓬莱　蓬莱の上ゑやみまれ歌二人　青羅
太箸　ゑはしや後よいとし　梅ゑ　暁臺
鏡餅　かゝみもち母　春して又悲し　、
萬歳　万象や舞おさるれきゑる新　太祇

万象やりれふさゑる寿ゑ　蘭更
万象やゑゑはさちゑふ落太夫　太祇
ゑ駒や男ゑはるる女のゑ　、
やりねるやゑ心きるめ大きけ　、
投生れやおのき引保し洞ゑき　蘭更
おさゑるれ庭よけゑる二は哉　太祇
ゑ玉や扇子教保ふるの屋　、
来玉やきゑるめ来の医三代　蘭更
笑ゑるれ松やゑる臭ゑるれは哉　青羅
るれはゑ人春ゑる宮はゑわうけ　暁臺
松けゑ玉ひてゑゑくわう来つゑ

春駒
羽子
宝引
御降り
歳玉
子日
若菜

芹齋

七艸

初寅

佐儀長

福引の員数くゝ芹ゝる　、　書屋

七ゝるや歯ゝのやもあまわるる　太祇

七ゝるや足ゝもる起　、

七ゝるやゝてもねのなつゝき　書屋

七ゝるやゝ七ゝ五ゝ　、

ゝつ京や恋つゝ赤ゝ山おろし　太祇

餅やゝ年おいゝ海ゝ　、

おゝゝろゝんゝのゝやゝ夕ゝ山ゝ　書屋

節

御忌

養父入

せゝ皆やゝゝゝ冨く梅の花　、

嫁入ゝ　ゝも多ゝ　ゝ忌後　太祇

ゝ忌ゝゝゝ時ゝゝ京のゝゝ　蕪村

やゝ入や琴ゝゝゝゝゝ新の雪　太祇

菊入の影けゝゝゝゝゝの宿　、

やゝ入ゝ島ゝゝゝゝゝの新の例　、

やゝ入や伝ゝを出ゝゝ拙川　蕪村

やゝ入や木履ゝかゝゝゝ　蕪村

やゝ入やついてゝゝ春ゝ　書屋

小書院のゝゝくゝや福寿ゝ　ゝ祇

福寿艸

木の芽

柳芽をゝゝて又一日ゝゝゝ　書屋

若艸

くるるや梅ぞ乃ふ畦 暁臺
ひらるるやすて四ふるるやあ畑 太祇
ふるるやあるこの木もちる菫 〃
まもはや十そふるほる小ふる 〃
ちるめくるつるめくるつる日数 〃 暁臺
梅活て有も僅んとも新 太祇
よおそとをうてくきる園の梅 〃
吹飛の梅本盃の梅咲よ寄り 安村
裏見ぬる古きやうやの梅の花 〃
ひ猪よよ寄ひ寄ひる梅の月 〃
折あしれうよ花とうる梅花 〃

梅

梅咲やうるさもをうよ小盃 〃
白梅の折るまるあるようるれ 〃
梅の白昼時を白梅よ使りう 〃
大ともせうう梅うちよゆ 暁臺
梅ちるやうよ書ふ灯をとり 〃
梅早し坂わるふのるるむき 〃
咲の梅うふくむ板戸いる 〃
梅の月朔泳うふ人ふうん 〃
梅月をうるおるわを 〃
梅咲て十日よるるめ月おか 〃
るよ尺梅白ひる忘の下 蘭更

畠中の梅は反まく男、うゑ、
答へふるさとうらゝ梅の花、
笑ひ戸やけく梅さくまゝ梅ばち、
梅の香ゝやゝ寒ける聖いかる、
梅うゝに園杉のしろく曇めくる、
梅の月梅まつてくきい松の月、
うゝとゝてもカ立つる野ゝ梅ゝ、
梅の月をくくうゝもつて白いりう、
ゝゝよく髪かく梅の日新ゝ、
梅の月白いつゝうゝて昔ゝ王、
梅うゝやの梅ゝうゝ分ゝもあるう、

本年

こゝをはゝうこゝはゝうしもあれ梅のゝ、
傳ゝうゝゝゝゝも梅ゝゝはひゝ、
雪ゝうゝ花咲ゝ梅ゝ思ゝ口ゝ、
白いりう梅千ゝるかの梅ゝ花、
梅ゝうゝゝ新くおゝゝ灯ゝ、
引ゝゝゝ梅をめゝる神ゝ　太祇
一ゝゝも梅ゝ梅ゝゝゝゝ　蕪村
思ゆくや梅みゝゝ反ゝ、
一ゝの栗庵の梅老ゝ、
月もやゝほのゝうゝゝ神ゝ　青屋
ゝゝ家のゝゝ分ゝ梅ゝ、

吹あまして井の中にまいて柳　暁甚
折られて杯の酒こぼれ　〃
ちかの柳よりかけて陰深し　〃
まゝ折よる波のさゝらなみ　〃
のゝくと折くよりつくる　〃
やまけし煙をふるむ柳うる　〃
灯ともしこの油うけ折れうれ　〃
煙管て別村の柳は寄ゝう　蘭文
ふいりて書ゝうゝゆゝ折れ　〃
折おや柳の中　〃
柳のゝくて折る門の内　〃

落葉　花活よ二寸短しふまけゝ　太祇
え舟めあゝひうゝや落の葉　〃
大きを蓋て苦しぬゝ　〃
散ふめひゝ落ゝ　冢文
芹の葉や指あゝ除ゝの泥　太祇
古ゝよりゝて立て芹　蕪村
冬新の小松を つまむ田井の芹　〃
芹麦よりやあまゝ　冢文
皮ひて緑多ゝ入江や芹の角　太祇
ゝゝゝて夕ひゝ芹の角　〃
松若緑　ひゝしもすゝれ松のみゝ　冢文

㊄

松の花
海苔
和布
鴬

春秋もなくばあらじを松の花　嘯居
海苔すくふ水の一重や宵の雨　蕪村
かの海のりは江戸紫は白ひかれ　青居
春海苔や庭笊にほし延かな　杲文
若めは戸や二見のわかめあらひかな　蕪村
江戸へやる鴬啼や海はなうへ　太祇
うくひすや紫のうらゝ水の音かな　、
鳥をまもて鴬となく子狩れ　蕪村
鴬は二声耳のほとりかな　、
鴬はほやよのゝは柳　、
烏来て鴬氷へいはずかしめる

鴬を孫口なよし画田ひと　、
春もやゝあなた鴬よもし声　、
音もうしろくうくひすの初音かな　青蘿
うくひすやうめのまきれぬ夕啼に　暁台
鴬や目はげちつゝまなかなき　、
たふかく初音鴬移りせよ　、
鴬は嘴ふところ残りや川　、
うくひすは小まどにあきらかなき　、
うくひすのゆくてかくて彼岸ら　、
鴬や半よう子家この幕むかふ　東文
うくひすやはしに餅をまく訪ねぬなく　、

うくひすの初音もうくらあの日
山もやうやうくもうすハす
うくひすの声よりはてひとすじ
うくひすの声ゆるなりあけやまのうる
白奥　きゝ奥やきゝとゝまたつきのれる
きゝ奥の物よつまるハい　蓋北
白奥は豊月を遠き海を　晩堂
蛤　蜆　春日　蛤は春のけしきを　宗文
夕照や壺かりる堤ふる　太祇
春日や手出も門くくくくん
鶯鶯のうるまを引まるに　蓋蘇

神ゝけは初の中りまるうる　晩堂
春はりや春の春のあるうれ敵ゝれ　ゝ
折つまてゝ夕あを拾ふまるれ　ゝ
春はりや国の戸ゝて時を富ふ　宗文
けゝはりやきゝ冊ゝ沈む岩はきゝ　ゝ
春の日やつひくくるる土　砌立　ゝ
春はるゝ四鶯晩ゝ春ゝ磯ゝ北　ゝ
鶯の土ゝ月をまゝ孔まゝりれ　ゝ
りくくゝ春はりゝ新やゝのある　ゝ
春ゝやゝ屋ゝまゝちくゝ新ゝさり　太祇
春ゝやゝ世蘇ゝ鶯の月ハゝ　ゝ

春風

春雨やけぶりして家もとし　蕪村
霞ながら紫とまるせみの聲　蕪村
けぶるもの人ともやけぶるもの　〃
けぶるかな草葉の雨もまちがほ　〃
春雨や門田の小道ぬかるみ　〃
門番の番人ぬれ屋根ばかり　〃
春雨のあしにみられる　〃
鶯の谷よりとまるまちがほ　〃
里の子はおもいくさまをとる　〃
春雨もてやすしかるる　〃
降くるまぬらるもの　〃

春雨やあるきあるのあさ線　〃
旅ぬれ東風ふいて火鉢哉　太祇
東風吹とうとうりそうと怪者　〃
雪とけ東風ふむや怪る　〃
人まちに春や亀やまの方　〃
堀川や水の下りまちの方　〃
春の山ふるさをなる雲　蕪村
ぬれちどうつくんりまちの方　春雨
吹まも柔もしうけりやまの方　〃
就子是て注やわるまちの方　暁臺
ふの系の上ふふまちの方　〃

手の羽をとれハりこそ雪のあ　、
うつくしきあつさもちらしそ雪の水　系文
小上ハあつきさそ雪のあつさ　、
雪のはりうつやはつれあ　、
雪のよこ雪ニ山ろ雪ニ山水　、
あつよされ蔭をなりそ雪のあ　、
ふ雪や雪とそのほへうつるそら　太祇
踏分し雪解ニ雪ちり除ふち　、
雪解や水ふくろ鉄雪鳥　吱董
雪解ニ仲中川をり来ル　、
三ぬ雪と踏ひ雪ニ雪解ル　、

雪解

春雪

春雪とまりり除の雪解ル　系文
水をそ大井ハるや雪の雪　太祇
ひくまてみふ雪や雪ル雪　、
ふの雪ふて志賀ハ雪や雪の雪　雪蓬
雪の雪屋ニ掃ふ元旦ふ雪　吱董
雪の雪ふも雪ふ雪ハ雪ル　系文
節月ニ雪ル雪ふ雪やこふ　、
髮ぬまて雪の雪ニ人の戻り　、
破山雪ニ人ニ雪ル雪ル雪　、
月燈りて拾も解り雪川ル　雪蓬
けハ月を舟ふ雪ハ雪ふ雪　太祇

氷解

霞

うらむ身ハ灯より寸実や出ふかな　、
脊のひくき馬に乗る日の霞かな　蕪村
訃文手唐人居ぬ初かれを　、
りなき脂のあつかる壁の霞　春泥
うち根まて春麦の苔や夕かれぬ　、
衛くさて霞を雲に灯ともかな　暁台
画つるとかあく永り二日ふ　、
八重かあ日荒ていまき掛すれ　、
霞さの見て落陽紫のすほひかな　、
出さあや花のあつゝとうちかれし　、
けはる日や霞滴し松の中　宋文

長閑
春宵
春夜

吹矢ふくるまありて野辺の末　、
うち帰や桜はなうめう春霞　、
らうれしゆくきゐゐの夕かすみ　、
長閑さに香焼の神社出る望　太祇
うはる我人と語るや春の宵　、
春の夜や女を帰る作りこと　、
春の夜やうしろいを捨る町の雪　蕪村
春の夜や子成あふ寄り眠る人さ　春泥
春の夜や幾と一つあつれ聖ゆかし　暁台
春の夜や何ゆるゝなき三編の枕　、
けふの夜やあまくつけて尺八の声　宋文

春月　隅川の末ありやうすの月　素堂
大文字かすかなるもの月　暁雲
くさかハ煙ぞうすもの月　〃
余寒　きさく蕊の形ふす畠うる　太祇
情なし拾銭くれる余寒うる　〃
冥の戸の大洗ちいさき余寒ぶ　芋村
鮫咎は余寒ぞ口まる今ぞうる　素堂

如月　如月ぞえつく聖ぞのうぶ　素堂

初午　初午やうのぞうむる一のくし　太祇
初午やぞ人ぞうぞいなり詣　素文
初午やぞもも桂も人のこえ　〃
涅槃会　ちろゆく板彫やわうん像　太祇
わうん会ぞまるもやうぞ西の西　素堂
仮坊の梅ぞうてわうふわうん　〃
わうん会や教鈴ぞ味を味鳥　〃
わうんぞやぞ下ぞまるぞ山　暁雲
古寺や用ぞ元ぞわうん　素文
起くぞにんぞ呼ぶいんぞ　太祇
斤掃ぞいんぞ猿ぞ名ぞ　素文

彼岸

朧月　はゝとこ網うつ舟やおぼろ月　太祇
宗長一巻宗祇やおぼろ月　〃
数てりわ寺や秋月　〃
おぼろ月堤こ沼水や宗　芭村
芝叫ておろふ宮や朧月　〃
ゑ桜こ光をとゝのへくおぼろ月　〃
寺ゆきこ井寺ておぼろ　宗長
老をセハ去賀ゆかりや秋月　〃
ゑ掛ゆ狩垣宮こて朧月　晩巷
秋ゆや宗祇の宮ゆ行ゆ　〃
おぼろ月ゑ宮と秋ゆ　〃

おとゝゝ同ゆくおぼろ月　〃
おぼろ月やハやゝて明ゆ　宗文
興つゝて山ゝゝ月ゆ秋ゆ　〃
出代やゝのふゝふいゝ夜を　太祇
出代の夜へおゝゝかゝゝ　〃
出ゝゝゝ笑ゝむゝゝゝ　宗長
出代や天ゝゝ花田ゆ月切　晩巷
ゝけゝふや新ゝ網元川の家　太祇
ゝけゝふや代本かゝく家ゆ上　〃
陽炎　陽ゝをゝこゝ行ゆ柴の家　宗長
ゝけゝふの行ゝゝゝ庵ゆ友　〃

けらふやまさかりなる虫のこゑ　曉雲

同たゝなはす　まゝこゝむしの口ずさみ

くもゐふやよ小蔦なる色と

同たゝにけのうるかの身うるし

けらふや拔くわふる拔はなし　素文

けらふはなかの起るはなし

同たゝや一秋つよちくさ事

かけらふのかハ鄭うあ事さ

糸旌　糸旌よ万解りうやこう

いゝゆふのうれくて鄭うう

鳥巣　うはなかやまさ一寸はなるうき

雉子　うはなかやあるうかはなるのはな

うはなかやひるうちきハほうん

雉子巣て巣ふてきまさる周うの　太祇

ううき男うはきうはきえうれ

雉子ゆて成るかはなはハうし　芋村

ヒううるはなはなるうはなはなるる　まゝ蘆

きゝ峠てあるハ秋うけえうれ

三位の川ふよてきはなる　曉雲

人の紀はなはるのうきえけるう

はのあるうよ年かうれきれか

紀はうれ壁つて成走る絲ふる　素文

蕣

雲雀

、

、

、

太祇

子安村

曉登

素文

、

、

、

太祇

子安村

曉登

素文

雀子

帰厂

牧恒の山路を口よりあひくろ

ひとくらふの畑ばたけ

ひとくろ畑てううきさ歩る野牧

雲雀鳴くくこけ光もくるる孔

雲ばてはるかくれ者くる

雀子はくくけさくるや秋すめ

雀子の咎なくて牧の土色

帰厂ぬるきぬ牧ちちよ成よりく

立厂の夏ふてもりくて陸古墓

雀妙うう立ばるきてハ日と遠る

厂人手別る鳥ちくるかれる

蝶

風ふく人耳くすぐるてふ　曉堂
ほゝゑみおりて　〃
ちるをしらぬ　〃
つゝとあるくてみるや　素文
堀川の畠ゝ　太祇
ゝ　〃
ゝ　〃
ゝ　〃
伊勢武者　村
ちゝ　〃
蝶　〃
そせ　〃

蜂

すゝけたる　曉堂
蝶とんでゆくよりもゆくよ　〃
おもの陰ゆ　素文
めるゝ　〃
ゝ　〃
ゝ　〃
ゝ　〃
人ゝ　太祇
ゝ　〃
以我蜂や　素文
蜂ゝ　太祇

蛙

[illegible]なきものの隠るる　[illegible]村

うるまいて皆〳〵[illegible]隠るめ　、

[illegible]て白ふまて[illegible]隠れ　、

田めあのうるかなる隠　[illegible]

[illegible]やうるかなる隠　晩蛍

蓮まるをうちて[illegible]隠　、

隠る田めあらうちて月[illegible]　[illegible]文

[illegible]隠もるるもめ[illegible]　、

むしまてはまへまる隠る　、

田るうてるる[illegible]隠れ　太秋

扇土の小月はまるき田るる　[illegible]村

田螺

猫戀

紅毒

かるすきるるるるる田るる弘　[illegible]

埜肥芹生[illegible]水や田るー味　晩蛍

田るる味の敵るるるるぬ　、

[illegible]の尊るるるるや猫の恋　太秋

[illegible]るる飯さへるるるるる[illegible]　、

るるはむ猫あるるる猫のるる　、

角はるるるて味やるむわるるる　[illegible]

恋猫や竹の古さを味わるる　晩蛍

けふはさややるるるるる猫の恋　[illegible]文

[illegible]梅[illegible]やわるへのるるるる　太秋

るるる梅するるるるるるる八[illegible]の[illegible]　晩蛍

初櫻　咲初てうれしき梅とけふ見れば　太祇
　　雪のかまくらぬるゝ初櫻
　　中なる梅よりうれしき初さくら　〃
　　けつれやむ山のこゝろ雪　曉雲
　　一日ハ雲のこゝろ雪　系文
系櫻　いとゝ櫻竹いろ弾竹　麥村
　　いとゝ櫻分るこゝろ雪　系文
椿　赤椿咲しもとへこゝろ　曉雲
　　ふ椿ゑるこゝろ雪　系文
接木　咲ゑるこゝろ狐の宮　〃
　　接ハ拾て接木の基竹立　太祇

接後ぬ雪よりさき一枝えらむ　〃
　　雪内して枝こゝろ接木　〃
　　人まゝ見ぬ雪こゝろ接枝　〃
苗代　苗代ようれしき新竹系　麥村
　　苗代やりあてゝ通る緑　大我
耕　耕やむしり右系竹ちの姫　〃
畑打　畑打や細きこゝろ竹系　麥村
　　畑打や系ふれもくゝるこゝろ　〃
　　鋤の梅竹ゝ系ふ田歩　青蘿
　　手ゝ墨竹ゝ畑ゝちの乱　曉雲
　　打ゝ見たゝ田ゝれ　系文

焼野　太秋

野とも焼や芒くさ武生ぬたくさの火　蕉村

この野さく今ぬ火より焼ぬ野哉　暁塵

かつらや焼ぬのすくれまつる

川越てをれぬ焼ぬ　東文

うぬと芒の花ぬ焼ぬを折ひろう

獨活　山葵　芹蕨　菜花

山葵あつて俗ちしめ辛きぬ　太秋

かくひ掘て名ん之洗ふひとり弘

夏さくるかくひ　暁塵

なのもやよしぬ　太秋

菜ぬ花ぬ俗の俳ぬ　蕉村

なのぬ花やわ泉に白ひ

白ぬくさり弘　菜ぬ花のはうれ　まさ

なのもやまるより　蕉の人　暁塵

かくちるの菜ぬ花ぬ

なの花ぬ　〃

ちの花の姿ぬ　〃

菜ぬ花ぬ兎の耳ぬはつる　〃

なの花や都ぬ　〃

ちのもやる里をくぬ　東文

風うぬ夕ぬ　太秋

山伏ぬ城下や八十の数　〃

いう心ぬ里ぬの夕くれ　〃

切てやはんとなるをやいうみぼう　晩象
れをもやうしゝ張よなるぬ八巾　、

弥生　大佛はやうらゝ紙ゝ弘生　家文
曲水　曲ゝよ事ゝ白はを系事を　晩象
雛　拙あゝまゝ紙ゝ紙一紙の屋　太祇
ものひうや立ゝふへくい袖の上　、
ゆれ紙生ゝ色ゝをや紙二対　芳村
紙ゝゝる報はゝゝゝや報の藤　芳村

夢作紙ゝ氣い紙はなゝひ弁　晩象
烏紙の事像ゝ小氣の年借弘　、
ひゝの弓ゝゝ社ゝゝゝ佛弘　、
鶏を画ゝゝや井はをや鶏合　太祇
二ゝ日ゝゝを事ゝ出て年ふ汐弘　、
汐　片作ゝてあゝゝゝ中汐干ゝれ　、
于　生を汐やヨテよゝける牧の鶏　芳蘭
ゝゝこゝゝ解ゝ八毎ゝり汐干鶏　、
寒飡　事ゝ合ゝ史ゝ事ゝをぬ加義をゝや我　太祇
鞦韆　ゝゝゝゝ会ゝ伏古ゝゝゝゝゝ　、
安良麓花　やゝゝゝ世ゝよゝゝ事ゝゝゝゝ　晩象

㊂ 壬生念佛

ほの染めし給すゝや壬生念仏　太祇
猿ハ菊をもてなし壬生念仏　〻

御身拭

嵯峨の日の手向や御身拭　〻

永日

さくら木の日のありしや長き坂　〻
永き日やいまさら思ふ昔の事　〻

遅日

遅き日や雉子の下りゐる橋の上　〻
遅き日やつもりて遠き昔かな　〻

春雨

春雨に鍋を提げて行く人のみ　〻
春雨や蓬をのばす艸の道　〻
春雨やものがたりゆく蓑と傘　〻
春雨にぬれつゝ屋根の毬哉　蕪村

髪つみて月の出しほは嵐哉　嘯山
春雨の赤き山より降りぬ　〻
降そゝぐ雨にぬれて春の海　〻
旅人の越川や越るはるの雨　嘯風
春雨や猿子抱く蓑笠の雫　〻
春雨の朱とうつ柳の本すゑ　巣文
春雨や枝の雫のおもたし　〻
春雨やちるかげ遠し山の裾　〻

鳥雲入

鳥雲に入て木の芽春の風　〻

若鮎

若鮎や水の中には尾の影　太祇
若鮎や谷の小笹も一葉行　蕪村

炉塞

鮎汲釣瓶は先に築かれ　、

炉ふさきや老ぬきる人の俄出来し　太祇

蚕

きぶうく我の撫姪飼ふ蚕かな　、

髪結ふて花にかりけれ蚕時　、

蚕飼ふ女や古き身たしなみ

新搦の灯ハ点し蚕時　蕪村

挑

去年より蚕はしめぬ小百姓　、

わかれに遠くも伺ふ桑子哉　東文

桃傍枝一枝てや桃の花　太祇

堅ちうく代え秋らや桃の花　、

交へ折てぬ桃くさられしさよ　蕪村

花

吟て帰て本にひらくはや桃の花　、

及好やもまさまとも桃や咲　、

桃さやけ畫きまつぬ杉は八重　青蘿

包げしげしより咲くもらぬ花　、

月によるおとろし桃の宿　几董

登戸門の中うくめ余や桃ぬ花　東文

見つ遙て花なんにほうり憎まれ　太祇

ひらく桃のはまや花さかり　、

花見うち紙にちらきゆへくる　蕪村

花よるさ挽よ花めてうつ足　、

花すみ見ハらちえうきめし哉　、

花ゆゑ[illegible]ゆ[illegible]ひめ[illegible]
めも[illegible]ゆゑ[illegible]
ゆゑ花ゆ花より起[illegible]
花ゆ中形[illegible]曲[illegible]小坂[illegible]
ひや[illegible]
土佐の良[illegible]花[illegible]幕
[illegible]
月[illegible]
花七[illegible]七[illegible]
[illegible]ゆ信矣上戸の良[illegible]
花の[illegible]

、
まり[illegible]
、
、
、
咲[illegible]
、
、
、
柔[illegible]
、

櫻

花ゆ[illegible]
花[illegible]
[illegible]
[illegible]櫻[illegible]
咲[illegible]
[illegible]ゆ[illegible]
鳥[illegible]
櫻[illegible]
[illegible]
松の[illegible]
[illegible]

、
、
太祇
、
、
、
村
、
、
まり[illegible]
、
、
、

[illegible]ゆふ桜　吹堂

[illegible]けのうちとすし　〃

[illegible]井は桜咲よりの　〃

[illegible]ちる　果文

[illegible]もなき桜うゑ　〃

[illegible]竹はちく　〃

[illegible]ほ[illegible]　〃

[illegible]ゆく釣小舟　〃

[illegible]魚[illegible]　〃

[illegible]つ[illegible]桜　太祇

[illegible]桜　子[illegible]村

遅櫻

梨花

風吉はそうみの夫や[illegible]桜　〃

[illegible]のほうや初[illegible]　吹堂

[illegible]雑[illegible]の花　〃

[illegible]と詩[illegible]花　〃

海棠

海棠や[illegible]模[illegible]　〃

海棠や戸[illegible]　果文

[illegible]て本[illegible]代　太祇

躑躅

[illegible]井は[illegible]や　〃

土堤はや行[illegible]咲　〃

大寺や竈はつりは赤[illegible]　〃

[illegible]や塔[illegible]　果文

山吹　太秋

山吹や葉よりも花のさきかさね
山吹を猫さ〻ぬけてとおりけり
山吹や世を捨て入る山ぶし
芋けんぴ山のなりもの哉　晴雨
山吹や鶯なくなる花の陰　素文
おもひ入る山ぶしの岩屋哉
山ぶきや花よりとまる川鳥
山ぶきの花よりとまる鶯哉
連翹や笑ふ母屋の白髪町　太秋
けしやうしるる竹垣の雪ぬけ
世のうらうらやびゆく

連翹
藤

しらくさやうるめ花
月よまさく杉ぬけのうるみ
花ぬけもひかりのうるみ
はなぶさ藤棚まきまき
ぬけまうもむかしやれの名
見物や五六寸ちるうるみ花
葉掛ちらさよりぬけさるぶ
れくらやん行きてすうるま
うるうるきるあるぬくれる
めやは垣よりもも葉ぬけ
夜ぬけあるるもいるるる

菫

虎杖

茶摘　太祇

春暮　村雨

行春　村雨

俳諧發句新五子稿

平安　嘉會室亭編

夏之部

四月　　蘭更

[illegible]

更衣　　太祇

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一條一越つきの白うの衣く、
きるもうくうんきの人の祝ひの
時ひつ牛よりうや文衣、
恒のうのひきをとをぬ文衣
文衣ひうの白うの白の時、
幸めうひ講ひう文衣、
うさく赤き白袴うう文衣
ひうとやはもめの白めの文衣、
ゑもの袴つくくんやうもく
りとけよをくいとくをの狩
ゆく女狩をやはきまし、

太秋

拾

綿被

青笠

鍋祭

葵祭

敷須七條の白文の袴か拾の袴
ゆきけもきの人の拾を、
拾きて身八女うの白めきの、
庶て文を八白めきの秋
綿服ておうの袴をの狩の宮
綿めきてゑうやもめの
めきやの嵐の巣もかきの白
綿をふの袴やまきすをを
七条八条ほを育つ縮条
ゑみ日ゑうの袴の車をく袴
下くめ下のめきもあつひ条を

太秋

系文

袴

系文

太秋

系文

袴

咲条

数ならぬ蓮うけとるまろうどかな　素文

沖みあるひ地よりもあるる後嘉弘

彩素麦晩ゑもそも佛生家　太秋

灌佛

灌佛や仮ゑ刻一小刀自　、

灌佛ハはるかもれもそ弘　素村

夏書

大佛ハ日ハ弘　、

夏書

夏ゑうきよるる半とまつふ後ロ白　太秋

味噌けとそめ女のゑ弘　素村

短夜

短夜やら氣ものもあ西　太秋

ふるるやゑ弘あるふ心　、

みうおや芝田井ゑ後　素村

みるやや芝ゑ場ふ恒ゑひま　、

うるるゑ雲るるけるるゑ日ゑ　、

ゑゑあゑや後のゑゑ川の氣わるる　、

うるゑやゑるるゑ川の氣わるる　素村

うるゑやゑつ氣ものゑあ氣　晩美

月ハ月ゑハうゑやうゑ　、

みゑゑやゑ雲れあるふ　素文

青嵐

花ゑあゑゑ本ゑるけゑ　、

変秋

保ゑ後ゑゑあるけく雲ゑ秋　太秋

素秋や後ゑるるゑ　、

素後樓ゑ門ゑ弘　、

苔花　　、　　茅村

牡丹　　太祇

岩角や大鷹さうけん苔の花　　、

俤ゝ見てゝ冨まとゝ牡丹哉　　、

きゝつぼゝ牡丹の接ぎ木哉　　、

門へ来ゝ花ゝ見ゝつゝほゝんゝ　　、

きゝそのも外持ぬ手のほゝんゝ　　茅村

花ゝゝゝきゝつゝる色牡丹哉　　青蘿

花やうゝゝきつゝるほゝんゝ　　梵色

ふゝゝまて月ゝゝけゝ白牡丹　　、

白牡丹只一ゝんゝ　　茅文

芍藥　　芍藥ハかよいよゝ花のうてゝる乳　　青蘿

芍藥ゝ蛇ゝゝゝ旅ゝゝ　　梵色

花菱　　くゝまりやゝ信のあゝひも恋し　　茅文

牡若　　まゝんやうけゝふゝんやかよたゝる　　太祇

かまたゝやゝ田へゝゝゝ牡丹　　、

切るゝんの芍ゝゝゝ　　、

るゝゝゝハりゝまゝぬ物や牡丹　　、

ふゝゝゝ中ゝゝ牡丹　　茅村

ゝゝゝゝ挿のゝゝのかまたゝる　　青蘿

ゝゝゝゝやゝゝゝゝ牡丹　　梵色

かまたゝゝまゝ月牡丹　　、

妹うや川原ひりハかきつら　素文
長寿やおうなうなるよつて　、
寺ゝ花はさいてうるあるる　安七村
なるきゝあるの成けゝ　素意
もけゝ　たらうるゆる　、
花市ゝやいつを又　哉
わよりも　茅子　、
みうつるゆゝ　ほけゝ　、
子のよう　茅子　素文
ふ市ゝ　花遠　、
うゝ花や　多人　安村

墨栗

卯花

うゝ花のはるる　青家
みのもゝ　ゝ　哉
うゝもの中　ゝ　太祇
隈くうゝ　ゝ　安村
なるの　ゝ　、
ハゝ　ゝ　、
成ゝ　ゝ　、
金ゝ　ゝ　、
そ　ゝ　哉
ゝ　ゝ　、
成ゝ　ゝ　素文

若葉

若楓　その楓ちるまでの掃きすて　蕪村
葉櫻　葉さくらの一本咲しや昔の雪　太祇
　　葉櫻やちるあそこらさそこと成　暁臺
葉木立　おやこ川の月あてやこの木立　太祇
　　花うの実ちるもちるもこの木立　蕪村
　　牧牛を出るこの木立　〃
　　うつくしき恵もこの木立　系文
　　ちるまでの大きいふしの保しこの木立　〃
新樹　保しこの本造の月新樹　太祇
　　人嬉て新樹の裏あれ新樹哉　暁臺
葉桜　ちるまでの月の新樹　〃

葉野　鞠ちるまでの伐もこの夏野哉　蕪村
　　夏方の月も抱るこの野哉　〃
　　角あげて牛人をこの夏野引　春帆
葉山　大木をこの夏戻りこの夏山　系文
　　さくらおくこの夏山ちるこの夏　〃
葉河　夏川や馬繋おくこの夏　〃
　　夏の月川長ながこの夏　〃
等　　等やおりひもこの夏はのやま　太祇
　　牛おるや村の紫ふる御山ほる　〃
　　牛おるや一本ふくこの夏　暁臺
　　牛のこやの月ぬけたる吹ちひま　系文

蓼

天の咲く越やし草ゆかあえ　芝村
計めあるちるは草の細葉引　咲堂
小くさくて草ちるなきに　乗文
れもひとの人まきまに　太祇
なとわまは味えめえてほとき　、
ゐまにてあるくなとなぬほとき　芝村
書屋のみうくゆまや時　、
時ゐ雑の玉なしり　、
横ゆは耳分てあ時ゐ　芝義
花ゆまの春ゆ時鳥　、
ほとあしまの春　咲堂

時鳥

ゐ紀野ゆのようほとき
時ゐ作しゆ世年　、
ほとあ古泉は和風ゆみゆの　、
十日ほゆは法師とさん時ゐ　、
ほとまはゆ法師ゆ　、
村ゐ鶯なしふ山巳りの　乗文
時ゐ村は年中ゆもなりう　、
ほとあしまゐもをうむ　、
自花は春既のに山やほとゆ　、
ゐまあるちるとゆ時ゐ　、
鶯ゆなるこゆやほとさん　、

おとし入ほとゝぎす　　、
ほうらや月は上り　時　　、
かゝとゝぎすふもとぬぬ　　子村
花はあしかもとゝ峰うかんこゝ　　素堂
はゝきを見しゝゝ分よ雨あゝ　　、
雨居ゝ世やおとゝき聖ゝもあゝん　　時雨
人行ゝすゝ世ゝゝゝ　　、
もゝをゝ行ゝゝ旅はかんこゝ　　素文
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ雨あゝ　　、
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　　、

閑居鳥

言原雀

蝙蝠

かはほりや月のほゝとゝさゝん　　史邑
初蝉や初雨のゝゝれ鳴るゝ　　、
初蝉の声よりたゝいてゝゝゝゝ　　素文
初蝉は今這のぼる枝まえ　　、
ほゝゝゝゝゝ乾く板ゝゝ　　太祇
ほゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　　、
ほゝゝゝゝ蓮のゝゝ柔のゝゝゝ　　、
蚊はゝゝゝはゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　　、
おゝゝはゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　　、
蚤の出れゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　　、

初蝉

子子

蚊

[illegible]

蚊帳

[illegible]

三布 上麻 [illegible] 太祇

[illegible]

[illegible] 蕪村

初鰹

[illegible] 曉臺

[illegible] 閑更

[illegible] 吹色

[illegible] 太祇

[illegible]

五月

[illegible] 太祇

[illegible] 閑更

菖蒲

[illegible] 青蘿

十万の形やいつものあやめ草　柔之

藥玉

ほとゝぎす　吹竜

幟

古よりの幟なるべし　太祇

幟より母うへ姫なりけり　〃

粽

嘉吉の八月の西よりの粽　〃

なくほとゝぎすちまきよりく母の声　〃

粽とけハ陸奥のあやめ草　吹竜

孫粽ゆめ　柔之

競馬

くらべ馬　太祇

くらべ馬神さびたる人の子ども　吹竜

五月雨

五月雨のくもり出たり　太祇

つまゝと小机品なくやみ月雨　〃

五月雨やおもふ夏立まさる水　〃

旅人や我が里原五月雨　〃

塔見ても庭の草やゝ五月雨　〃

柏あり降る雨ほしゝ月雨　〃

五月雨やあるゝ人ゝ旅の宿　〃

五月雨や川うちわたす蓑　給　〃

はられのかくて暮るゝ月日哉　蕪村

蚊遣焚くてゝ暮るゝ月雨　〃

五月雨や岩みち夜啼しつゝ　几董
かり来る蜂のすさひや五月雨　、
ちゝみ子の卵生しより五月雨　、
ひとしきり足よの名に付る月雨　東文

虎雨
傘焼し其日も来るか虎が雨　太祇
川よあれ伊豆よのやまそゝくの雨　、

竹植日
月かけて竹植し日は猪来るぞ　、
竹植し文政坊を訪ふはかなし　几董

葉月
猪寝て人寝よなかる夜の月　太祇
掃除して猪の寝やなつの月　、
斤なき八かさそしてふしる夜の月　、

さはかりは兵舟やなつの月　蕪村
小よるこほろきんて夜は月　東文
流しらやまくれて夏の月　、

藻花
藻の花に小魚そのまゝまじりけり　几董
そのひに咲ける流れ舟に乗　東文

萍
うき草やはつせて八丈月の上　青蘿

百合
ゆく外や百合に匂ふ風来寺　几董
東向し百合は咲つ垣根かな　東文

紅花
紅の村や梅の下みなのそる　、

紫陽花
あぢさゐや移ひそめし一夜の雨　几董
行ちからやよきは人のやむぞ　、

花菖蒲

むかしやゑみ尺がたは上るゝれ 、

茄子

地に綴ちらばりし茄子汁 太祇

もぎ捨し茄子がらハもすて茄子まで 素文

瓜

人くゝる縄もなかりし瓜ばたけ 太祇

盗人に出合ふ狐や瓜ばたけ 、

ゆふむのなぐさみうしや瓜のむ 青蘿

丁瓜や絵になきのまゝうつせ貝 暁臺

日盛りや上曲りて韃胡瓜 素文

暁ふかみ吟ちぎるゝ瓜のつる 、

合歓花

合歓咲や猿猴の皃の岩が上 、

青梅

よき梅が見ひ纔しくれなゐなるかな 太祇

青梅や女のすなる仮の葉 、

青梅や塩すりながらうらしさ 素文

若竹

若竹や枝もなき家の窓の数 太祇

わか竹や橋本の遊女ありやなし 蕪村

若竹や暁の雨宵が雨 、

わか竹に月のうつるよのかげり 青蘿

若竹ハ月にやさしふけしさされ 暁臺

わか竹やまとにひとり子のほる 素文

若竹や絆し去るに風かゝる 、

田植

やさしさや田を植るゝも母が側 太祇

寺うらも遠くと出る田植引 、

連ようしろ田植うま　、　茅村
田ぼうの我が村の田植ゑ　、
おくいうう序かう田植ゑ　、
植ゑ　おハこ日の門田ゑ　茅蕉
笑ゑんとすれハ時と田唄ゑ　、
蕉雨ゑ引て中田植ゑ　吃蕉
つくゑ　植田ゑ百ゑ　、
松陰　中ゑ列ゑ田植ゑ　柔文
早乙女　ゑし女やえ入ゑ年ゑ　太祇
よゑ女のゑゑ植ゑ　、
青田　孤ゑ女ゑ屋ゑ田ゑ　茅蕉

蛍

ゆゑ　虹や田ゑ時ゑ　柔文
うゑ見ゑ茅ゑ　太祇
ゑゑ　、
見ゑ　、
ゑ　、
ゑ　茅村
ゑ　茅蕉
月ゑ　、
茅ゑ　吃蕉
茅ゑ　、
茅ゑ　、

蝸牛

玉川のすゑやくるけて子の音　系之
つくゝわにそゝのふくおろれ
やくなくてめをまつ朱れ音弘　
おをとこあめとくゆる歩るや蝸牛　太祇
台ゝめあゆくおそろし蝸牛　
引入くゝ爰ろはうら蝸牛　
打ちと角打ちめうかたう　
氣うき打ちよけそむやかたう　
角出して這いてやくうたう　
打ちたふうあるふ角ぬきみしら　孝村
ふるとゆる玉川水宿のかたう　

蚊巻

帰るまぬけむしふ蚊やうれ　太祇
蚊やう天もてゆやうきぬ門蚊ひ　
蚊きう大けうくゝ蚊やれのまく　
蚊きして宮うれやるぬ月　孝村
蚊を大や栄門多くお叫う　
ぬをする打ぬの上の蚊やうる　
一日ぬうて蚊やうのけうる乳　
蚊立くゝ白和うき蚊やうれ　
宿くして蚊をよるよるよるよる弘　
蚊柱や東ゝむもの子ぬうう　暁台
志くて打余ぬるうる水野弘　太祇

蚊柱
水鶏

鵜

挑灯をかりやとあるかりに　麥村
小鷺啼くなるかの里ハ月ハ出　まき
ゆ鷺ハ之ハ出てもくよたるひよの　吟堂
ひくなるかれるやハ小鷺　素文
ゑ小やなるぬ小鷺のさそはゞ　〃
鵜ゑ出すゑ宮のなるゑハ小鷺　〃
舟梁ゑ卵さめるあるゑやなる鵜も　太祇
ゑゑゑゑ鵜川あるゑ小　〃
ゆゑもれ月ゑるゑる鵜川に　〃
鵜ゑゑゑゑ宮ゑやゑをたゑ　〃
ゑゑふ鵜のゑゑやはるゑれゑ　麥村

鵜のふきゑゑまゑゑる鵜川に　〃
ゑゑ鵜のゑゑゑゑゑゑゑの中　麥堂
吟ハさゑゑゑゑし鵜ゑれ冊　吟堂
ほゑゑゑゑゑゑゑの鵜縄に　素文
ゑゑゑゑゑゑゑゑ鵜ゑ　〃
ゑゑゑゑハ鵜も巣ゑゑゑ　〃
ゑゑハ土ゑゑゑ入火事ゑゑ　吟堂
武士ゑゑの時さゑゑゑゑに　素文
かゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ鵜　太祇
ゑゑゑゑゑゑ縄のゑゑ入神のうち　〃

水鳥巣
鹿子
火串
照射
帷子

蛙よや吟の初め猛うるよ　、
蛙よ蛙よ七つ八つまでは猛はくる　、
かくひくよ松葉さしれて星の我　晩霜
隻羽織　例よ亀の高めひやや夏ね　太祇
晒　川風よ小さなる晒うる船　、

六月　六月は大ひらきつうるう　晩霜
六月の原ひ鉄ぬの原ひ　素文
氷室　氷室も鉄よ原うる　晩霜

一夜酒　門家は蛙ひかるもしめ　素文
祇園會　二階ひ初めるや祇の見　晩霜
祇園よ夕ひもひ嘯れ　太祇
自祇や人壱起ひ山ひ　、
松ひ山ひ山ひ山ひ山ひ神　晩霜
富士詣　天地の半ひ山ひ山ひ　素文
御殺　ひ戸や夏ひ山ひ殺　、
ゆ所も山ひ山ひ山ひ殺　太祇
芽柳　ぬ山ひ山ひ芽の柳は流ひ　素文
夏神楽　ひ祭写はひ山ひ夏神楽　素村

暑

きはめて暑き年や致仕の君　太祇
空のれよ月をすゝめあるなつぎる　〃
見てゐても安い暑さかなつぎる　〃
暑さよりあるゝ思ひ出うめ　〃
夜毒てゝ行のきゝやゝ暑ぎる　〃
頻をきて上戸ぎりあつぎる　〃
病て死ぬ人を感ずる暑ぎる　〃
乞隠も蓋の干上りけりぎる　〃
杖ひて旅人学ゝいつゝぎる　〃
ぶ石よりおきの光るあつぎる　〃
本枕よ耳のはりてあつよし　〃

夕立

陽炎よ櫂のあゝいつゝぎる　蕪村
病人の夕は櫂点ふあつぎる　暁臺
いと口はあるきてあつきよえぶ　〃
暑き日や寄きぶふてゝえゝ　〃
日は恩ハおもひるゝもいつぎる　〃
いつゝきや雨後晴ぎ　〃
小田や猪高木は大き伐　太祇
ゆつゝちや戸さゝ上ぎる庭　〃
拭ふ人家百よ夕立あゝ　〃
夕ゝちや屋よりゝ下ぎる　〃
ゆつゝちはあゝの宮や雲のり　〃

雲峯

ゆつるもみすらんとまるるよ森の上　、　青嶺

夕くもや秋を伝へ桑けるゆ

清滅しけるこ糸重るきりの

太祇

あめつの底うち時やこきの

安村

むのきハ重るかるるてきの

、

きりの見ゆ既よ小笹の吹かひ事

晩象

あるつるきるよ重ひく思ひ

果文

野もなるて牧あるる雨の

太祇

杉伝ふ雨の石中紀

、

もるもうるるふ雨の

、

古あるさ二本さるるるるる

安村

扇

團

同ふ雨ふ雨ふるる

、

中寿るるもうる新ふ

太祇

ふるるるる色ふ引る

、

雨るるふ雨るなるるるる

、

四ふの笠ふるるゆく

、

木刀も清つる雨

安村

穴作て雨ふる雨る

、

中ほるや斤ふ里ふ杉ふ

太祇

土用ほる梯ふ泊の蜂ふ

、

中ほるるるる角やる

、

ひる干や秋ふ祇ふる杉の

、

土用干

むし干やむしみち旗のはなれ〳〵　、

汗

ほそうや弓に肩ぬく袖みちら　、

涼

すゞしさや都を竪に流れ川　蕪村

すゞしさや無名ちりて水の音　春泥

すゞしくも野山に月を見尽しつ　暁台

朱ちらし故人むかふるさゝろあり　、

川すゞし月影におろしたれ　東文

切株にかゝる對して月すゞし　、

納涼

関守が岩戸口によるすゞしさ　太祇

五柱京ハやみて涼の鳴れし　、

まづ水にあやうき橋を涼みけり　、

水棲が腰ハ叢草にすゞみかな　、

宵越てすゞしさや宮壷が鳴　、

芦原ハ細工あそびや夕すゞみ　蕪村

李一木なるよ涼のたよりかな　春泥

禄子に乳の毛ひきて夕涼　暁台

猿赤きお髭つけ出んゆふすゞみ　、

一人居ハ涼の邪魔ぞ手すりかな　閑文

ゆふ涼粽の芋こがれ姫水うけり　、

簟

年がよる父のあたりはやたかむしろ　太祇

細脛にゆふ毛はらうたかむしろ　蕪村

金山寺が傍似合しや簟　暁台

竹婦人　はうきぬ手婦人　吹わくるまて面入る手婦人　菊蘭　系文

風薫　うす紙よりうる樂しやうも　菊村

赤水　雲時や神さ月まつ菊紅　系文

清水　小ぬかて雲うる門急ぬ　太祇

菊水　猫うつてしちまれぬ水を　、

菊水　菊ぬかく青竹しぬ水ぬ　菊村

　　あ晶はけ山ぬけゆく清水ぬ　、

　　かく清くる清ぬ水ぬ　系文

　　う抱ぬの湯うきらぬ水ぬ　、

　　菊水や入江の清ぬ水ぬ　菊村

心太　菊ぬうつてうれぬ花ぬ　、

　　ものあるあるけや心太　太祇

　　夏ぬて突ぬ心太　、

　　水ぬ中へ祇ぬ心太　、

　　かぬ日や古ぬ心太　、

香薫散　歌きぬし旅の日数や香薫散　、

川狩　川狩や御目ぬもぬ刀　、

川狩や魚串ぬいし　系文

林檎　わくぬ八ぬ林檎あやまり　菊村

蓮　先い寺ぬ蓮かくぬ　太祇

　　ぬぬ蓮ぬ泥ぬ瓶の蓮　、

蓮は香や深くもらりる紫は蔵り　柔文
蓮の実や茶まで百歩はなれるひろ　太祇

澤浮

沢深や花は散れども奥の池　柔村
沢深ハ水のうつくしく矢尾ヶ瀬

麻

あさ海や麻外あをの照り月　柔村
すハ〳〵と抜ハ明やすし麻畠　陵魚

蓴菜

右左四角よりほさはさけそめる　柔文
蓴菜や走りもとけきあ西

綿花

毋は活やわらの糸はもうり　太祇
綿花

夕良

夕良の中ひもたるめ垣抜け　柔文
夕良やうつくしきるるよふ花　太祇

夕良やり炊抜て天ハ涼て　柔村
夕良は蚊の鳴うつくしれ　陵魚
夕良ふ良やあうつくしき屋ねや蓮　柔文
夕良や花ようふ分うくよ　太祇

畫良

夕良や赤ハ分りて涼は蚊ら　柔村
夕良や町よりなりり抗の数　太祇

蟬

うつ蝉は寄りうつくれ　柔村
烏まで赤し蝉は寄　太祇
蝉なくやり人帰るは　柔村
せくやうはふ二日三日は月
蝉峠て枝も脇のなるら　柔文

蠅

蠅をうつ苫屋や閑な人　太祇
蠅をうつ苫や涼もまばらなり　〃
生来さる碁の蠅はひとつうち　〃
蠅まくしさうなを立わくる　吃堂

蚤

蚤蚊追ふ古家や夏はよしの哉　〃

蚤虫

行脚僧と宿あらそふ蚤虫　冥丈
旅姿の灯もうしえてうなむし　〃

蚋

田の畦や蚋の山すげる破みの　〃

弐冊之内　三宅氏